

地域おこし協力隊活動報告会



3月28日に令和6年度地域おこし協力隊活動報告会を開催しました。

令和6年度、地域おこし協力隊として活動を行った8人の隊員が、1年間の活動報告を行ったほか、そのうち令和6年度で退任した4人の隊員からは3年間の総まとめの報告も行いました。

退任した4人は、今後も石巻に住み続け、これまでの経験を活かして活動していきます。

各隊員の報告内容などについては移住定住ポータルサイト「いしのまきを選ぶ」サイトから確認ください。



小暮隊員、山下隊員、松本隊員、米倉隊員
活動お疲れ様でした!!

石巻の隠れた名所

上品山・河北上品山牧場



上品山(標高465.7m)の山頂からは眼下にゆったりと流れる北上川や広大な田園風景、雄大な奥羽山脈に連なる山々が一望でき、牡鹿半島や奥松島も望めます。

市営の河北上品山牧場では、緑のじゅうたんの上で放牧された牛がのんびりと草を食べたり、木陰で休んだりする様子を見ることができます。

※放牧中の牛にストレスを与えないように近づかないでください。



図1 文化庁 2023
『発掘された日本列島2023 調査研究最前線』
南境型釣針(左)、沼津型釣針(中央・右)

クジラの町として有名な石巻。クジラの捕獲には釣針という道具を使いますが、石巻における釣針の歴史は縄文時代まで遡ります。

図1は、縄文時代中～後期(約

5500～3200年前)にかけて使用された釣針です。ニホンジカの角を素材としており、下部の凸部を柄に差し込んで使用していました。中央に開けられた孔には縄を結び付け、その縄を引くことで釣針が命中した獲物を捕獲していたと考えられます。

図1左の逆ハート形の釣針は、仙台湾～三陸沿岸地域において確認されている釣針であり、今のところ南境貝塚から発見されたものが最も古いものです。そのため、このタイプの釣針は、石巻で発明された可能性があり、石巻における釣針の歴史の始まりと言えます。また、他に類を見ないほどの発見数を誇ることから、「南境型」みなみ

(文化財) たんぽう

129

石巻の地名が付いた縄文時代の釣針

石巻市教育委員会生涯学習課

ざかいがた釣針(もりがしら)と呼ばれています。

南境型釣針の発明からまもなく、図1中央・右のようなトゲトゲした複雑な形の釣針が登場します。カエシを複数付けることは、獲物に逃げられないための工夫であり、南境型釣針が発達したものと考えられます。このタイプの釣針は石巻湾周辺地域以外ではほとんど見られず、沼津貝塚からの発見数が著しいことから、「沼津型(ぬまづがた)釣針(もりがしら)」と呼ばれています。

独自の釣針を発明し発達させた石巻の縄文人ですが、その釣針どのような魚を捕っていたのか、実はまだ良く分かっていません。ただ、魚を捕るための道具と技術は、縄文時代の石巻においてすでに確立されていました。これは漁業が盛んな町石巻の歴史を考える上で、とても大切なことなのです。